

書 評 REVIEWS



Jolene ZIGAROVICH,
*Writing Death and Absence in the Victorian Novel:
Engraved Narratives*

(x+199 頁, Palgrave Macmillan,

2012 年, 本体価格 £55.00)

ISBN: 9781137007025

(評) 松本靖彦
Yasuhiko MATSUMOTO

まず本書の概要を示し、次に私見を述べる。

序章

序章では、本書の主題に関連する先行研究に触れつつ、著者の議論の理論的枠組み（基本は脱構築とポスト構造主義理論、あとは精神分析理論が少々）と、本書の考察の目的、そして全体のアウトラインを提示している。

産業化と都市化による急激な社会変化に晒されただけでなく、科学の進歩によって来世や魂の存在への信仰を揺さぶられたヴィクトリア朝人たちは、その反動であるかのように商業化され極端に華美な喪の儀礼という形で死をフェティッシュ化した。その一方でまた彼らは、現実の社会では見出し難い確かさを小説の中に——それも登場人物の「死」の内に——求めた。ヴィクトリア朝の読者たちは行方不明になった登場人物が——生存者としてであれ死者としてであれ——必ず戻ってくることを望んだのである。当時の読者が小説中の「死」に確定性を求めたことは『ヴィレット』の結末に対する不満の声が大きかったことから分かる。

しかし、文学作品に登場する人物の「死」に確かさを求める企図には、そもそも死というものが語り得ないものであるだけに、言語表象そのものの不可能性・限界性と直結したパラドックスが付き纏う。そして、このパラドックスは、主要な人物が死んだのかどうかははっきりしないまま行方不明になっている場合さらに複雑な問題を孕んだものになる。本書が検討する5作品（ブロンテの『ヴィレット』、コリンズの『白衣の女』、ディケンズの『荒涼館』、『われら互いの友』、『エ

ドウィン・ドルードの謎』)は、いずれもそのような作品であり、本書はテキストに存在する不在——より具体的に言うとそれは「行方不明の身体 (a missing body)」や(埋葬が正しく完了していない)「空っぽの墓 (an empty tomb)」の形で描かれる——の内に表現されたヴィクトリア朝人の不安を分析する。

第1章

第1章は、未完了の埋葬が『ヴィレット』でどのように表現されているかについての分析である。

自伝記者は自らの死についてだけは書き記すことができない。自伝はその分の空白を含むことになり、常に未完に終わる宿命にある。ここには言語表象の1つの限界が示されているといえるが、自伝の結末を人生の結末の提喩として捉えるならば、(自伝は決して完結することがないわけだから)自伝記者はテキスト上の不死を得るといえる。自伝を書くことは、死を先延ばしにし、死に抗うことでもあるのだ。

ブロンテの『ヴィレット』は自伝の形式で語られる物語であるが、語り手のルーシー・スノウは回想に苦痛を伴う過去の出来事とは直面するのを避ける傾向にある。そのため、いくつかの重要な局面において、実際のところ彼女が何を体験したのかははっきり理解するのが難しい。このような性質をもった語りにおいて、ルーシーは語らないことによって語っているといえるのであり、彼女が何を語らないでおこうと選択しているかに注目する必要がある。自分の人生の物語など無価値だ、というルーシーだが、その自己否定的な態度は、老境に達した彼女が自伝を書いているという事実(上述したように、それは死に抗うことに通じる)と矛盾する。『荒涼館』のエスタ同様、彼女も自分を打ち消しながら書く書き手なのである。

ルーシーの回想に特徴的なのは、彼女が自分の身に起こった耐え難い喪失体験と向き合うことができず、それ故その喪失をきちんと嘆くこともできないでいることである。つまり、彼女は自分の失ったものが何であるのか直視し、きっぱり過去を過去として葬ることが出来ないでいるのだ。

従って、決然と過去を過去、不在を不在とすることができないでいる彼女の人生には、きちんと埋葬されていない亡霊のような living-deaths がひしめくことになる。ルーシーにとって決定的に語り得ないトラウマは、両親を失った(らしい)ことと、ポールを失った(らしい)ことであろうが、最終的に彼女はそのいずれにも直面し得ていないし、ポールの運命も曖昧にされたままで終わっている。過去を直視することは、取りも直さずポールの死を認めてきちんと彼を埋葬することだ。愛する人を決定的に葬らざるを得なくなる選択肢を到底受け入れられない

ルーシーは、ポールの死を先延ばしにし、彼の身体を永遠に宙ぶらりんのままにしたのである。

第2章

「空っぽの墓」と不完全な埋葬をめぐる物語として、エスタの語りを中心に『荒涼館』を読み直すのが第2章の主旨である。

『オリヴァー・トウィスト』のオリヴァー同様、『荒涼館』のエスタも死と恥辱のもとに生を享けた。母親のデッドロック夫人は赤ん坊(エスタ)は死んだとミス・バーバリーから伝えられており、夫人は自分の娘が生きていることは知らされていない。一方、ミス・バーバリーから「おまえなど生まれてこない方がよかった」と存在を全否定され、母親の記憶の中では名前も付けられないまま葬られた存在で居続ける他ないエスタは、生まれると同時に「死」を宣告されたようなものである。生きてはいるが象徴的には死んでいる立場の彼女は、いわば生と死の間にいるのである。

エスタにとっても母親は失われた存在だが、母親の死の詳細を聞かされておらず、墓を見せられたわけでもないのだから、彼女の中で母親をきっぱりと叩くことができない。エスタの中で母親の埋葬が完了していないために、彼女が思い描く母親の墓は空っぽであり、空白である。エスタの過去はこの空っぽの墓=空白の上に築かれたに等しく、彼女はこの空白を埋めるべく象徴的な墓の掘り起こしと埋葬を繰り返すことになる、と著者は論じる。

たとえば、著者はエスタは「生まれてくるべきではなかった子ども」としての自分を3度象徴的に葬っているという。1度目は、上述したようにミス・バーバリーに存在価値を否定された時。2度目は、ミス・バーバリーが亡くなり寄宿学校に行くことになった彼女が長年唯一の心の友であった人形を埋める時。そして3度目は、煉瓦職人の妻ジェニーの死んだ赤ん坊を自分の名前が縫い取られたハンカチでくるんだ時。エスタはその赤子を「エスタ・サマソン」として葬っているのである。このように自分の存在に対して否定的なエスタの態度は、彼女の語りにも反映している。彼女は打ち消しつつ書く書き手であり、生(存在)と死(不在)の間にいる語り手である。死んだはずなのに生きていて、生と死の間で語る……これは亡霊のような存在である。

(娘のエスタにとって)死んだはずなのに実は生きている母親のデッドロック夫人もまた亡霊のような存在であり、死の影の濃いチェズニー・ウォルド(そこには幽霊が出ると噂される Ghost Walk もある)で暮している。従って、熱病から回復したエスタの前に彼女が母親として姿を見せる時、それは墓が掘り起こされ、死んだ人間が蘇ったのに等しい。ただ、蘇ったのも束の間、すぐまたその場でエ

スタに対して「今後自分は死んだものと思ってくれ」と懇願するデッドロック夫人は再び「死ぬ」のである。夫人が実際に死んだ後、亡骸はチェズニー・ウォルドに手厚く葬られるが、その墓碑銘には嘘があり、彼女の死の真相は隠されている。ということは、一見埋葬は完了したようでも、レトリック上、デッドロック夫人の墓は空っぽなのだ。エスタの語りもダッシュ(ラカンの理論にも言及しながら著者はこれを「空白と死のしるし」と読む)で終わっている。埋葬も物語も完了していないのである。

第3章

本章で著者は、死んでいたと思われていた人物が蘇るというプロットが語りのレベルでどのように機能しているか、コリンズの『白衣の女』を中心に分析している。

物語の重要な登場人物が一応は死んだことになっているけれども実はまだ死んでいない、という設定はセンセーション・ノヴェルの定型である。コリンズの作品世界においても、死の告知は常に確定的なものとは限らず、言語も真実を伝えるとは限らない。

そのことをコリンズ作品において最も端的に示しているのが墓地、とりわけ墓碑銘である。著者はコリンズの初期作品に触れつつも『白衣の女』を中心にして、墓碑銘がいかに嘘をつき(墓碑銘通りの人物がその下に葬られているとは限らない)、いかに多くを(葬られたとされる人物、ひいてはその人物をめぐる人物相関図に至るまで)語り、いかに致命的に改竄され得るか、等の点について分析する。

また著者は——『大いなる遺産』冒頭でピップが両親の墓碑銘に刻印された文字の字体から2人の姿形を思い描く場面を引き合いに出して——「墓とは身体(死体)とテキストが出会い、融合する場である」との理論的前提を確認した上で、コリンズが作品中の墓碑銘をページ上に視覚的に生々しく再現することに心を砕いた経緯についても詳しく論じている。

さらに、この章を締めくくるにあたって、著者はコリンズ自身の墓碑を彼の作品中の墓碑と比較し、前者の特筆すべき点を指摘している。

第4章

本章で著者は『われら互いの友』の主要人物が死なずに(でも亡霊のように)生き続ける様を分析する。

ディケンズが死体に惹きつけられてやまなかったことはよく知られている。死体には「死んだはずなのに生き続けている」と感じさせる不気味な存在感があるのだ。死体に類する存在として(蠟人形、彫像はもちろん、ヴィーナス氏が扱う

骨格標本などを含む^{ひとがた}人形 (effigies) もディケンズ作品によく登場する。それらは、魂の抜け殻のように生気なく凍りついたような近代人の姿を風刺しているのであり、ヴェニアリング夫妻の周りにはまさにそのような人物たちが多く集まってくる。彼らは生きながら葬られているようなものであり、ユージーン・レイバーンもそのような人間のひとりとして物語に登場する。

生きることにどうしても本腰になれず亡霊のような存在だったレイバーンが、ヘッドストーンに襲われ、生死の境をさまよった挙句、自分が既に死者であるかのように語り始める時、その言葉遣いには現実味がある。レイバーンにも増して、はっきりと死者の意識で語るのがジョン・ハーモンであることは言うまでもない。

誰も自分の死を体験することはできないし、死後のことは知り得ないが、『われら互いの友』は、(レイバーン、ジェニー・レン、ハーモンの例にみるように) 死者の意識で語ることが基調となっている世界である。実はそこでは書くことと死 (不在) とが骨絡みになっている。たとえば、ジョン・ハーモンが「俺は死んだ (I am dead)」と語る時、それを可能にしているのは——つまり、象徴的にではあれ、生死の境を超越することを可能にしているのは——無いものをも在らしめてしまう、言語がもつスキャンダラスな表象の力なのである。

一方、『われら互いの友』の後書きには、トラウマ的な列車事故を経たディケンズがテキストの力——つまり書く力——によって自分の死に抗おうとする姿勢が読みとれる、と著者は言う。

第5章

終章において著者は、エドウィンならびに『エドウィン・ドルードの謎』(以下『エドウィン』) という作品を、生死の判別が不明のまま失われた対象として生き続ける「missing body」とみなし、改めてその問題性と魅力を分析している。

周知のように『エドウィン』という物語は、エドウィンが行方不明になった後、著者のディケンズが急死したため作品は未完に終わり、エドウィンも永遠に行方不明のままである。著者はこの状況を、エドウィン・ドルード (そして『エドウィン』という作品) は、失われた対象として——死んだ (dead) のではなくあくまで missing という状態で——永遠に生き続けているのだ、と読み替える。

『エドウィン』は「完 (THE END)」と刻印されるのを待ち続けているテキストなのであり、その結末は際限なく先延ばしにされているのである。この小説の執筆が途中で断ち切れ、作品が断片化されたからこそ、ディケンズが永遠に生き続けることが決定的になったのである。また、そこには未完の作品がもつ不滅性と完結した作品のもつ不滅性との違いが示されている。

最後に著者はこの議論をディケンズ自身にもあてはめ、彼の死後、出版社と広

告業者が彼の死への直接的な言及を極力避けながら彼の遺作の刊行から利益を得た経緯にも触れている。

以下、本書に対する私見を述べたい。著者の議論になかなか乗れず、小さい本なのに読むのに大層骨が折れた。しかし、まず(非常に生意気なことを言わせていただくわけだが)骨が折れた割には格別大きな発見も得られず、期待していた知的興奮も味わえなかった、と言わざるを得ない。著者の着眼点は興味深いし、議論も精緻で水準が高いとは思いますが、どうしても論点が細かすぎて、読了後本書で扱われた個々の作品の理解や解釈に重要な変更を迫られることはなかったからである。たとえば、『ヴィレット』で尼僧の「亡霊」が現われるタイミングと意味を、ルーシーの心の中での「(過去の)埋葬」と現実に行った埋葬とを絡めながら著者が1つ1つ丹念に解説していく箇所は「ほお成程」と面白く読めるのだが、だからと言って『ヴィレット』という作品の読み方が大きく変わるわけではない。

次に、最大の不満かつ疑問点について述べる。評者は抽象的な概念操作が(物事の意外な結びつきを教えてくれることがあるので)嫌いではないが、それでも著者の議論は時に形式主義的な論理を(そうすべきでないところで)わざと適用するという、ポスト構造主義思想にありがちな強引さが目立っていると思われる。一番気になったのは次の箇所である。著者は第4章でジョン・ハーモンの「テキスト上の死」について論じつつ、「常に間接的なものであり自分自身のものではありえない死というものは、最接近した時でさえフィクショナルなものだ」という Alan Friedman の言葉を引いているが(135)、一方、序章ではド・マンの ‘the living are struck dumb, frozen in their own death’ という言葉を引いて、墓碑銘の言語が持つインパクトについて論じている(10)。後者の death ですら figurative なものに過ぎないわよ、と著者に言われればそれまでだが、少なくともこの2つの文脈での「死」の濃度は違うはずだ。院生時代だったら舌舐めずりして読んだに違いない本なのだが、こういった箇所ではどうにも著者が良心的な言葉の遣い方をしているとは思えず、議論に乗れない箇所が多かった。

とはいえ、読んで大損したとは思わない。各作品論は興味深い細かい示唆に富む。「今時脱構築はないだろう」と毛嫌いするのでなければ、試しに興味ある章だけ拾って読むとよいだろう(評者には第3章のコリNZ論が最も面白く読めた)。注でラカンの *Écrits* が *Ethics* に化けていたり、*Armada* がブラッドン夫人の作品になっていたりしているのは御愛嬌と考えよう。